桃花源記　解答

A　語句の意味と読み

(1) 不思議に思う。 ／「異」は「ふつうとちがう」という字。「怪しむ」と同じく「変だ、不思議だと思う」

(2) すて（て）／（舟を）乗り捨てて・そこに置いて。 ／★ここの「舎」は「捨」と同じ「すてる」。原典の本によっては「捨」の字で書く。「宿舎」の「舎（いえ）」ではない

(3) ぱっと（目の前が）開けて、明るくなった。 ／★「豁然」＝からりと開けるさま、「開朗」＝ひらけて明るい。せまい穴から急に広い世界に出た場面

(4) 老人と子ども（老いも若きも）。 ／★「黄髪」＝白髪が黄ばむほどの老人、「垂髫」＝髪を結わずにたらした子ども。現代仮名遣いでは「こうはつすいちょう」

(5) にこやかに・なごやかに楽しむさまで。 ／「怡」は「よろこぶ・心がやわらぐ」という字。「並びに」は「みな・そろって」

(6) むかえて／招いて・迎えて。 ／★ここの「要」は「むかふ」と読み「迎える・招く」の意味。「要点」の「かなめ」の意味ではない

(7) 先祖（昔の祖先）。 ／「先の世（の人）」＝今の村人より前の代の人

B　句法

(8) 「〜しようと思う・〜したいと思う」（意志・願望）。訳＝その林の果てまで行ってみようと思った。 ／「欲」は「ほつす」と読み、上の動詞を未然形にして「ん（む）」をつけて返る。「窮む」＝行きつくところまで行く

(9) すぐに・そこで（そのまま）。 ／★本文には「便ち一山を得」「便ち要へて」と三回出る。「則（〜すれば）」「乃（そこで・なんと）」も「すなはち」と読むが、意味がちがうので字で見分ける

(10) 限定。訳＝やっと人（ひとり）が通れるだけだった。 ／「纔（わづかに）」は「やっと・かろうじて」。白文「纔通人」には「耳」「而已」のような字はないが、限定の意味に合わせて「のみ」と読み添える

(11) なんと（意外にも）。 ／★漁師にとって意外なことを述べる「乃ち」。前の「乃ち大いに驚き」の「乃ち」は「そこで」くらいの軽い意味

(12) （論じるまでもなく）言うまでもない。 ／★⑬と組んで「Aさえ知らない、ましてBは言うまでもない」という形。今の中国語の「無論（〜にかかわらず）」とはちがう。「魏晋に論無し」と読む教科書もある

(13) 「〜する値打ちがない・〜するほどのことではない」。 ／白文は「不足為外人道也」。「足る」＝十分である、それを「不（ず）」で打ち消す。文末の「也」は断定の「なり」

C　主語・指す内容

(14) 両岸に数百歩も続き、ほかの木がまじらず、香りのよい草が美しく、花びらが乱れ散っている、桃の花の林のようす。 ／直前の「忽ち桃花の林に逢ふ」から「落英繽紛たり」までの景色をまとめる

(15) 主語＝漁師（漁人）。「之」＝村の人がたずねた「どこから来たのか」ということ（「たずねた村の人」としてもよい）。 ／★直前の「従りて来たる所を問ふ」でたずねたのは村の人、答えたのは漁師。主語が入れかわる

(16) 招いた人＝村の人（漁師を見て驚いた村人）。招かれた人＝漁師。 ／★家に帰ったのは村の人で、漁師はその家に連れて行かれた。漁師が自分の家に帰ったのではない

(17) たずねたのは村の人々。たずねた相手は漁師。 ／「何れの世なるか」は疑問（今はどの王朝の時代か）。外の世界を知らない村の人が、外から来た漁師にたずねている

D　口語訳

(18) 谷川に沿って（舟で）進んでいくうちに、どれほどの道のりを来たのか分からなくなった。 ／★「遠近を忘る」＝遠いか近いか（どこまで来たか）が分からなくなる。現代仮名遣いでは「えんきん」

(19) 老人も子どもも、みなにこやかに、それぞれ楽しんでいた。

(20) なんと漢という王朝があったことさえ知らず、まして魏や晋のことは言うまでもなかった。 ／王朝の順は 秦→漢→魏→晋。村の先祖が来たのは秦の時代

(21) （ここのことは）外の世界の人に話すほどのことではありません。 ／「外人」＝この村の外の世界の人。「道ふ」＝言う・話す

桃花源記　解答／現代語訳

E　内容・記述

(22) 洞穴の入り口ははじめとても狭く、人ひとりがやっと通れるほどだったが、数十歩進むと急に目の前がからりと開け、明るく広々とした土地が現れたという変化。

(23) 土地が広く家も田畑も整い、老人も子どももみななごやかに楽しんで暮らす平和な村。(三十九字) ／「平曠」「儼然」「良田美池」「鶏犬相聞こゆ」＝豊かで整った村、⑦⑧＝人々の楽しげな暮らし

(24) 先祖が秦の時代の戦乱を避けて、妻子や村の人々を連れて世間から遠く離れたこの土地に来て、それ以来一度も外へ出ず、外の世界とへだたってしまったから。 ／秦のあとに漢が起こったので、秦の時代から外に出ていない村の人は漢を知らない

(25) この村のことを外の世界の人には話さないでほしい（外の人に知られたくない）と思っている。「話すほどのことではない」という遠回しの言い方で、口止めをしている。 ／★「話す値打ちがない」とへりくだって言いながら、ほんとうは「話さないで」という頼み。漁師がこれを守らず役所に知らせることで、話の結びにつながる

F　文学史・故事

(26) 桃源郷（とうげんきょう）。 ／「武陵桃源」「桃源」とも言う。題名の「桃花源」は物語の中の地名。「ここはまるで桃源郷だ」のように今も使う

(27) 東晋（から南朝の宋にかけて）の人。田園の暮らしをうたった「田園詩人」として知られる。 ／本文の書き出し「晋の太元中」の「太元」も東晋の年号

(28) 『帰去来辞』(「帰去来兮辞」とも)。 ／「辞」は詩に近い韻文。『桃花源記』の「記」は、できごとを書き記す散文

【現代語訳（全文)】

晋の太元年間のこと、武陵の人で、魚をとることを仕事にしている者がいた。(舟で）谷川に沿って進んでいくうちに、どれほどの道のりを来たのか分からなくなってしまった。ふと、桃の花の林に出会った。林は両岸をはさんで数百歩にわたって続き、その中にほかの木はまじっておらず、香りのよい草があざやかで美しく、散る花びらが入り乱れて舞っていた。漁師はこれをたいへん不思議に思った。さらに先へ進んで、その林の果てまで行ってみようと思った。

林は川の水源のところで終わり、そこに一つの山があった。山には小さな穴があって、かすかに光がさしているようだった。そこで漁師は舟を乗り捨てて、その穴から入っていった。はじめはとても狭く、やっと人ひとりが通れるほどだった。さらに数十歩進むと、ぱっと目の前が開けて明るくなった。

土地は平らで広々とし、家々はきちんと整って建ち並んでいた。よく肥えた田畑や美しい池、桑や竹のたぐいがあった。あぜ道は縦横に通じ、鶏や犬の鳴き声があちこちから聞こえてきた。その中を行き来して畑仕事をしている男女の服装は、すべて外の世界の人と同じであった。老人も子どもも、みなにこやかに、それぞれ楽しんでいた。

(村の人は）漁師を見ると、たいへん驚き、どこから来たのかとたずねた。(漁師は）詳しくこれに答えた。(村の人は）すぐに（漁師を）招いて家に連れて帰り、酒を用意し鶏をしめて料理を作って（もてなした)。村じゅうの人々はこの人が来たことを聞いて、みなやって来てあれこれとたずねた。

(村の人々が）自分たちで言うには、「先祖が秦の時代の戦乱をのがれ、妻子や村の仲間を引き連れて、この世間から遠く離れた土地にやって来て、それきり二度と外へは出なかった。こうして外の世界の人とへだたってしまったのです」とのことだった。(村の人々は）「今はいったい何という時代なのか」とたずねた。なんと漢という王朝があったことさえ知らず、まして魏や晋のことは言うまでもなかった。

この人（漁師）は、(村の人々のために）自分の聞き知っていることを一つ一つ詳しく話した。(村の人々は）みなため息をついて嘆いた。ほかの村人たちも、それぞれまた（漁師を）自分の家に招いて、みな酒や食事を出してもてなした。(漁師は）数日とどまったのち、別れを告げて去った。(そのとき）この村の人が（漁師に）告げて言うには、「(ここのことは）外の世界の人に話すほどのことではありません」とのことだった。